

【調査記録】

朝鮮総督府統治下の医師養成と中国大陸における従軍医療の実態 ：戦後の離島医療を担ったある医師の聞き書き（1）

関 耕平・橋本貴彦
(島根大学・立命館大学)

摘 要

本稿は、朝鮮総督府統治下の医師養成と中国大陸における敗戦前後の医療活動の実態についての、聞き書き記録である。朝鮮総督府統治下における軍医養成と中国大陸北部における1945年までの従軍医療活動の実態が明らかにされている。

キーワード：医師養成，軍医，医専，興城陸軍病院，奉天，引揚げ

はじめに：本調査の位置づけと目的

本稿の目的は植民地統治下における朝鮮半島での医師養成の実態と敗戦前後の中国大陸における従軍医療活動の実態¹を明らかにすることである。本稿は現在の島根県隠岐郡海士町において長らく地域医療を担ったある医師の聞き書きである。同氏は、1946（昭21）年から1948（昭23）年に国立松江病院にて勤務、その後、旧海士村に当時あった国民健康保険海士診療所に1949（昭24）年1月31日に赴任し²、以後、1997（平9）年に退任するまで、約48年間に渡って同村、同町の地域医療を担ってきた。

第二次世界大戦後、外地からの引揚げ者の医師が日本の国民健康保険の診療所を中心とした過疎地域の医療を担ってきたと言われてきた³。しかし、この引揚げ者の医師のうちの多くが卒業したと思われる外地における医師養成機関に関する研究はきわめて少ない⁴。さらに、厚生省（現厚生労働省）の医師養成政策に係る戦後の史料においても、かつて日本政府が強く係ったはずの朝鮮、台湾などでの医学教育制度などの記述が少ない⁵。同氏が卒業した医育機関は、日本の統治下にあった朝鮮における道立大邱医学専門学校⁶である。本稿では軍医養成における独特の訓練などの様子が証言されており、興味深い。また、こうした訓練が後に、あらゆる

¹ 軍医の証言はいくつか残されている。例えば鈴木（1995）。

² 田邑（1974）、904頁。

³ 例えば、市町村が国民健康保険の診療所を建設する際、「当時は外地から帰還する医師や軍医などが、開業するにも困難な時代であったため、診療所の整備、医師住宅の提供によって医師確保も比較的容易であるという条件もあった」（厚生省・国民健康保険中央会編、1979、18頁）といわれている。

⁴ 吉田（2007）が指摘するように、そもそも軍事衛生・軍事医学関係の史料は、敗戦直後の焼却処分等によって他領域と比べても極端に少ない（2頁）。数少ない史料としては白楊会（1990）や竹内（2002）がある。

診療科に対応した「総合医」としての離島における同氏の医療活動を可能にしたとも考えられる。

なお本稿は同氏の出生から戦後、島根県への引揚げまでを範囲とし、海士診療所赴任以降から退職までの離島医療に関する部分については次稿とする。

以下、2012年2月2日に行った同氏の聞き書き記録である。

生い立ち、鬱陵島の記憶

私の生まれは、今の韓国・朝鮮で、引揚げ者。1922（大11）年7月21日に韓国の島・鬱陵島で生まれた。父は隠岐島後の五箇生まれで母は同じく島後の中村出身。県の職員として養蚕の技手・指導員をしていた父の仕事のため、三つ上の兄が1歳の時に母親3人で隠岐から鬱陵島へ渡った。そこで私と姉（2つ上）が生まれた。その島は小さいという印象があった。道が一本しか通っていない。その道が幹線道路になっていて、海岸から山のほうまでずっと続いていて坂道になっていた。上には小学校があり、自宅が一番高いところにあった。隣は巡査で、その左側には神社があり、桜の木が植えてあった。その実を採って食べて巡査に怒られた記憶がある。もちろん朝鮮人もたくさん住んでいて、それでも小学校は日本人だけが通っていた。日本人は島の人口の3割くらいもいただろうか。半分にも満たなかったと思う。その島はほとんど漁業の島。重国（シゲクニ）という開業医が道を挟んで向かいに住んでいたことを覚えている。凧揚げや魚釣りをして遊んだ記憶がある。ブリが釣れたりしていたよ。

朝鮮本土へ

当時の尋常小学校1年生の入学式を鬱陵島で済ませて、その日のうちに連絡船で朝鮮本土へ渡った。大邱（テグ）⁷へ家族で移住した。そのころはタイキユウと言っていた。父の仕事の関係で移住した。同じく養蚕関連の仕事をして、その後農林学校の事務の仕事をしていたようだ。連絡船で朝鮮本土に渡ったとき、自転車が見えて、親に、「あれは何だ？」と聞いた。鬱陵島では自転車なんて乗り物はなかった、見たこともなかった。大邱に行くと自動車もあって

⁵ 厚生省医務局（1965）には朝鮮と台湾に係る医学教育制度に関する記述はなく、両総督府から医師や歯科医師の免許を受けて、日本に引き揚げてきた人たちが日本で医療活動を行うことができるような特別の試験を課したという記述があるのみである（167頁）。この試験を受験し合格した者は1947（昭22）年から1953（昭28）年までの7ヵ年で3,751名にのぼる（808頁）。戦前期の日本本土における医師養成問題、臨時医専の設置とその帰結については、橋本（2008）第二章を参照。

⁶ 佐藤（1956）には「昭和八年三月道立大邱医学講習所及び其の学徒を継承昇格、終戦時に至る」（116頁）という同校についての記述がみられる。

⁷ 善生（1925）によれば、大邱の地域単位の正式名称は、大邱府である。大邱府より広域の地域単位は道であるが、朝鮮では13の道があり、大邱府は慶尚北道に属していた。1923（大12）年末時点、慶尚北道の人口（邦人や当時の外国人を含む）は214万1,881人で、朝鮮全人口に占める割合は約12%である。慶尚北道のうちの大邱の人口は6万2,895人であった。同時期に5万人以上を超える都市は京城府（28万8,260人）、平壤府（9万5,049人）があり、大邱は全土第三位の人口規模を誇った（45-76頁）。当時の大邱府には、1万9,316人の日本に本籍を持つ人々が居住していた（80頁）。

本当にびっくりしたものだ。大邱には飛行機もあった、おそらく軍事的なものだろう。赤とんぼという練習機がいつも宙返りをしたりして練習をしていた。

尋常小学校の6年間は男だけのクラス、雪組に入っていた。花組というのが女の子のクラス。月組という男女共学のクラスもあった。当時は1クラス50人だった。大邱には小学校だけでも第4まで4校あったはず。それは日本人学校、尋常小学校で、朝鮮人は別の普通学校にいていた。

10銭を持って家族5人の夕飯の肉をお遣いに行った記憶がある。その時に、はじめから10銭を出さずに5銭を出して肉を切ってもらう。そしてそれと同じ量をもう5銭出してもらう。これは最初から10銭出すよりも多い量買えるんだ。こうして地元の人と駆け引きをしていた。目分量で肉を切っているからね。小学校で自習中に黒板に落書きして騒いで立たされたこともあった。本当は2時間くらい立ちっ放しでないといけないけど、先生が帰ってくる頃を見計らって立ったりしてズルをしたことを今でも覚えている。

兄のこと

3歳上の兄は1945（昭20）年5月に沖縄で戦死している。あと3ヶ月生きていればよかったね。軍医として外科を担当していた。満州鉄道⁸の病院から名古屋の部隊に配属、そのあと華北地方（北支）の陸軍病院に転属になって、家に何泊かしてから、その転属先に行った。その転属先の部隊が全部沖縄に移動したのが1944年。結局、翌年に全員が死亡、玉砕。沖縄に行かなかったら死ななかつたらう。

兄から「グントウカウカネオクレ」という電報が来たのを覚えている。軍刀、日本刀を買う、何かの暗示だったんだろう。軍医だった、将校だから軍刀は持っているはず、未だに何のことは分からないんだが、当時は沖縄にいるということは軍事機密で分からない、手紙に住所を書くこともできない。手紙では「常夏の島より」と書いてある、どこか島だというのは分かるんだが、沖縄ということは戦死の知らせで初めて知った⁹。

中学校から旧制医学専門学校（医専）¹⁰へ

中学が5年間、その後、医学部にあたるのが4年あった。中学の頃はクラスに1-2名は朝鮮人がいて、普通の朝鮮人は別の中学に行くんだが、優秀なのが数名一緒の中学に入っていた。中学は家から歩いて20-30分くらいの距離だった。その中学の隣が歩兵第80連隊。2,000人の将兵が駐屯していた。そこから中学に軍事教官がきて、鍛えられた。週1回軍事教練があって、鉄砲を担いだり匍匐（ほふく）前進させられたり。数ヶ月に1回野外演習もあった。山の上にテントを張って戦争と同じことをやらされた。飯盒で飯を炊いて、2晩くらい泊ってやらされる、これが大変だった。

⁸ 南満州鉄道株式会社のことを指すと思われる。

⁹ 当時の赴任地は軍事機密として秘密にされた。岩手県農村文化懇談会編（1961）には、検閲を潜り抜けて手紙の中の隠された記述や隠語のような形によって、赴任地を家族に知らせる兵士たちの手紙が紹介されている（133頁）。

医専¹¹に行くのは中学の時から決めていた。家から近かったし、兄の使った教科書や参考書が残っていて、家の経済的負担を考えると一番良かった。学費は1ヶ月10円だった、これを二回に分けて払う。当時の医専は厳しかった。講義は黒板の前でべらべらしゃべって、黒板に書いておしまい。学生がいよいよがいが関係ない、一人でしゃべってサーと帰ってしまう。追試というのもあるってそのための料金が1科目につき10円。月謝の1か月分、義理人情もない、ひどいもんだった。及落発表が毎年三月末にあって、落第するか進級するかが張り出される。直前まで教授会をやっている部屋の明かりがついていて、それが終わった晩も遅くに発表される。留年する学生の名前の上に「落」と書いている。大体1年目の時に解剖がネックで落ちるのが多かった。1学年の70人のうち10人は落第していた。ドイツ語や解剖、生理学、教養もあった。3回落第になると放校。日本本土、特に九州から来る学生が多くて、自分のような地元の中学から来たのは珍しかった。中学は2クラス100人くらいいたが、医専にきたのは3人程度だったと思う。中学の同期で優秀なのは大学に行った。ソウルにあった京城帝国大学にも3名くらい行っていたはず。定員70人のうち朝鮮人が特別枠で1割、7人だけ入っていた。成績の良い優秀なのが入ってくる。

死体解剖する時に解剖教室でやるんだけど、下が土間で、日本と違って大邱は冬なんか零下10℃まで下がる、猛烈に寒い。そこで死体を並べて解剖する、この神経がなんだ、この血管が名前なんだと、全部覚えなさいといけない。足、胴体、腕。入れ替わりながら、こっちが済んだら、今度はこっちと交代で部分的に勉強をする。死体は解剖室から持ち出し厳禁になっているのに、寒いからと下宿に布で巻いて持ち帰って、朝に返しているやつがいたよ。知らん顔して夜になるとまた持ち帰ってコタツに当たりながら勉強して、朝に返す。見つかったら放校だぞといってやったが。そうしないと試験に通らないという気持ちもあるんだね。解剖の試験はその場での口頭試問だから、現場でこの血管は？この骨は？と説明する。なかなか筆記できない。さらに、その口頭試問の時には合格か不合格かも言わない。追試に向けての勉強が必要かもわからない。教官は日本の東大や阪大出身の人たちだった。医専1年生が解剖・生理・ドイツ語を勉強する。それから、2年に入ると薬学が入る。薬理と、内科・外科の総論。実習は3年か

¹⁰ 佐藤（1956）によれば、日本統治下の朝鮮での医師養成機関（医育機構とも呼ぶ）は、終戦まで、京城大学医学部（1926年開設、国立）、京城医学専門学校（1916年開設、国立）、財団法人旭医学専門学校（1917年開設、私立）、財団法人京城女子医学専門学校（1938年開設、私立）、道立平壤医学専門学校（1933年開設、公立）、道立光州医学専門学校（1944年開設、公立）、道立咸興医学専門学校（1944年開設、公立）、道立大邱医学専門学校（1933年開設、公立）の合計8校である。開設から終戦時まで、日本人を3,160名、朝鮮人を3,340名の合計6,500名を医師として養成したと推定されている。このうち道立大邱医学専門学校では、入学定員が70名で、医師1,000名（うち日本人600名、朝鮮人400名）を養成してきたとされる。

¹¹ 前注のうち公（道）立大邱医学専門学校のこと。1938（昭13）年の東京朝日新聞に同校の広告が掲載されており（1月14日、東京朝日新聞朝刊7面）、以下の記述が確認できる。募集人員：約70名、出願期日：1月15日から3月15日、資格：中学校または高等普通学校卒業、朝鮮大邱東雲町、試験科目：外国語（英語またはドイツ語）・数学・国漢文、試験期日：3月22日から3月24日、試験場所：本校、受験案内郵券参銭要送付。

4年から。

軍医候補生¹²試験合格のあと

軍医候補生の試験を受けて合格したら、3ヶ月くらいの教育隊で訓練を受けた。当時のソウルの郊外で。候補生試験はほとんど8-9割は合格していた。通るんじゃなくて、通すんだ。消耗品として。軍医にして、戦争持って行って、死んでもらう、消耗品だよ¹³。その代わり、教育隊で鍛えたよ。

人間の解剖できないから、犬を使って。まず銃弾を受けて、呼吸ができなくなった時を想定して、気管挿管。気管切開して、息ができるように実験をやる。犬の喉を切って、そういう練習をまずさせられる。さらに、元気な犬の腹切って、腸出して切断して、もう一回そいつを繋いで修復する。その後、生きて手術成功、死んだら手術失敗。そういうことを確か3ヶ月間だったと思うが続けた。それ以外にも、防疫給水（疫病・生物兵器対策）なんかもあった。細菌学や毒ガスについての知識、教育を受けたよ。

毒ガス関連の教育ではテント張って、絶対空気が入らないようにして、その中に催涙ガスをたく、それからイチ・ニのサンで、3人ぐらい放り込んで、戸を締める、わしらが入る。その中で駆け足する、涙ボロボロで息は苦しくなって、テントの隙間どこか無いかと思って、そこで鼻出して。そんなことしたら外から蹴られる。最後には倒れて、それから引きずり出される。そんな練習をさせられた。実際に毒ガス吸ったものじゃないと、吸った患者が来た時に治療ができない、お前ら体験しろということ。

それでも教育隊で軍医候補生として、兵隊の身分としては高いから、普通の兵科の価値観から見ると、ちょっとうらやましいんだ、妬みがある。週に1回だけ、軍医候補生だけでも普通の兵隊のように鉄砲を持って、演習をする。その時は兵科の見習士官が教官でくる。この時ばかりは、という感じで思っておるから、もう徹底的にやられた、それこそ人間扱いで無い。雨が降ろうが、矢が降ろうが、どしゃぶりになろうが、予定変更は絶対に無い。お前、戦争に雨降ったから中止があるか、と。土砂降りの中、コウリャン畑の中で匍匐前進させられる。途中で倒れると頭を足で踏みつけられる。

演習から帰ると銃が泥だらけになっている。軍隊の常識ではチリひとつついていけぬ。これを磨くのを夜通しかかって作業しないといけぬ。きれいに磨いて油も挿して。ところが、

¹² 「短期現役軍医候補生（短現）」のことと思われる。1933（昭8）年の満州事変の軍医急速補充を目的に設置されたもので、原則として二年間現役軍医将校として勤務し、期間が終了すれば除隊できるという制度であった。この「短現」になるためには、4年時の試験にパスする必要があり、卒業後、全国の各部隊で集合教育を受け、入隊時は現役将校候補生（軍曹）、一ヶ月後に衛生部見習士官（曹長）に進み、さらに一ヶ月後に軍医少尉（大卒は中尉）に任官した。平時ならばそれぞれの任地で残りの1年10ヶ月を現役軍医将校として勤務し、それ以後は予備将校となって退役したが、当時は即日召集を受け、引き続きそのまま軍医として勤務した。橋本（1999）、191頁。

¹³ 実際に軍医の戦死者は決して少なくなく、法文系の学生よりもその戦没率は高かった。橋本（1999）、196頁。

学生時代の気分が抜けない、いい加減にしとこうと、雑巾で拭いて、見かけだけキレイにして、また残りは明日だと。そういう時に限って点検がある。「今から銃の点検、全員集合」ということになる。一つ一つ銃を点検して、いちゃもんつけて、それから前に引っ張り出してビンタ。そして、連帯責任ということでその班は、今から完全武装して舎前へ集合ということになる。みんな完全武装して、毒ガスマスク着けて衛庭へ並ぶ。4列縦隊に開け、って言ったら、4列縦隊にちょっと間隔をあける。「切磋琢磨始め」という号令の後、向かい合った者でお互いに殴り合いをする。加減してやったのが見つかったら、「お前は何を加減している、わしが代わりにやる」と、強く殴られた。本当に目玉から火花が出るね。

兵舎はコウリヤン畑の中にぽつんとあるような所だったが1週間に1回、日曜日に休暇がある。現地の人が道端で鉄板で焼いているような物を買って食べたりしてすごしていた。

軍医としての仕事のことなど

教育隊を終えてから興城陸軍病院¹⁴に行くことになった。当時の中国と満州とのちょうど境目ぐらいにあった。大きな都市だった。病院の患者収容定員が2,000人ぐらいで看護婦が500人ぐらいおった¹⁵。中国で戦闘した傷病兵の最終の病院だった。すでにその時期、1944年前後、アメリカの潜水艦が多くて日本本土へはもう連れて帰れない。そのために中国で負傷した重症患者はみんなここへ集まっていた。温泉もあり¹⁶看護婦も多かったので、患者は溢れていた。24、25歳前後の我々が軍医としてその病院にいた。2,000人の定員いっぱい、重症の患者を中心にあふれかえていた。重症患者には、間食に羊羹が出る。死ぬ前の重症患者には、羊羹やカステラが出る、その時代の甘いものは貴重だったから。そういう患者が、病院の南側にベッドごと出てきて、日光浴をする。設備は良かった。

一度、兵隊が盲腸になって、手術を手伝いに行った。ところが、戦争が激しくなって、麻酔薬が病院に無かった。温泉水が麻酔として効くかどうかテストすると言って、オペの時に温泉水を煮沸消毒して皮下注射した。当然痛がって、食塩水などいろいろと試していたよ。結局麻酔なしで手術して、最後は患者が失神していたよ。

¹⁴ 当時の満州国においてハルピン、奉天とならんで三つある関東軍下の大きな「一等陸軍病院」のひとつ。興城みどり会（1975）15頁。

¹⁵ そのうち200名以上は、研修中の陸軍看護婦生徒であったと考えられる。興城みどり会（1975）の記述によれば、関東軍は当時の大連にあった7つの女学校から最上級生を看護婦として募集し、ハルピン、大連、興城の病院で一年間教育を行った。興城陸軍病院に派遣された第1期生は終戦時すでに各陸軍病院に赴任しはらばらであったが、2期生2百数十名は各戦線、病院への配属直前に興城陸軍病院で敗戦を迎え、奉天近郊への病院の移動に同行、8月31日までそこに滞在し、9月2日には大連に帰ったという。

¹⁶ 白楊会（1980）には興城温泉病院プランという記述があり、「昭和二十年八月、錦州省興城に、国軍最初の温泉療養を兼ねる軍事部病院を開設することになった。院長要員として松島要、…現地に到着、開設準備中「ソ軍侵入」となった。八月十五日「終戦」を聞くや、松島軍医中校は、意を決して、後函を策することとし、全員直ちに難を奉天に避けて、全員、事なきを得た。」（313頁）とあり、温泉についての記述とともに敗戦直後の奉天への移動についても記されている。

終戦直後に病院を奉天市に移さなければならなくなった¹⁷。その小学校と工業学校を開放して仮の病院・入院施設にする、移転することになった。車もない中で鉄道、貨車で行くのだが、駅まで歩かねばならない。ちょうどその移動の日、将校以下、昼食をする。その時、部隊長が「薬剤官、準備は大丈夫か？十分あるか？」と言った。後から分かったのは青酸カリのこと。独歩が可能な患者だけを移動させる、あとの重症患者は自決だね¹⁸。

それから停車場まで歩いて行った。停車場まで、1 kmくらいのもんだっただろうか。雨の降る中、合羽が無いから、みんな頭から毛布掛けて、沿道をぞろぞろ歩いて行く、本当に惨めな敗残兵の姿¹⁹。映画で見る敗残兵の姿。そうすると沿道の中国人が手を叩いて喜んでいるんだよ。そして、乗るのは客車じゃない貨車に詰め込まれて。奉天にいて小学校、工業学校に患者をみんな押し込んだ。そのあと私ら軍医の仕事は何も無い。夏暑いので、同僚と一緒に川へ泳ぎ

¹⁷ 8月17日夕方に興城陸軍病院を出発し8月19日の早朝に奉天郊外に到着。到着先は奉天市近くの「宮ノ原」という駅で降り、宮の原工業学校跡を宿舎としたと考えられる。興城みどり会（1975）、吉田ともによる回想録（173頁）。

¹⁸ こうした後退の際の傷病兵の「処置」問題はほとんど実態が明らかになっていない。吉田（2007）によれば、1935年の「陣中要務令改正案」では退却の際に傷病兵を戦場に残置して敵の手に委ねることを是認していたが、1940年の「作戦要務令 第三部」においてこうした規定はなくなり「死傷者ハ万難ヲ排シテ敵手ニ委セザル如ク勉ムルヲ要ス」とされ、退却の際に捕虜となる可能性の高い重度の傷病兵を「処置」＝殺害してしまうことが一般化して行ったという。実際ここでの証言を裏付けるものと考えられる記述が、興城みどり会（1975）の中にも見出せる。

「目的地に達するまでもなく、死ぬかもわからず、現に青酸五百本用意しているとか。雨やまぬ。護送して下さる兵隊さんご苦勞様。私たちはもったいない」（157頁）、「雨の中を部隊は病院を捨てて出発した。動けない患者は注射で殺したと聞いた。万一の場合私どもにのませる青酸カリを班長殿が持っているとも聞いた。」（163頁）、「悔し涙を流しつつ、遅れまいと必死で歩く。荷物を巻きつけ、雨に打たれてぬれた体を休めたところは、南隊か、西隊か私は忘れた。そこは、ホールのような広い病室の真ん中が通路になっていて、私たちは音をしのばせ、声も立てずに通り過ぎた。そのホールは真っ白いカーテンが全部降ろされ、窓ぎわのベッドには静かに患者さんが寝ておられるのである。その横を黙々と、看護婦さんが担架の患者さんを外に運び出している。私たちが悲愴な思いで、駅へ向かって逃げる間、ここは静かに静かに真っ白いベッドが並んでいる、時間のない世界だった。私は瞬間、見てはならないものを見た思いだったし、皆もただ黙って駅まで歩いた。引揚げ後、二十三年に、本籍の岐阜船津町の役場から「興城陸軍病院に終戦時入院していた船津町出身の二名の軍人の消息」の問い合わせを受けた。私は当時まだ看護婦生徒で教育期間中であったことを書き、入院患者のことは全く知らないままに興城を後にし、宮の原で部隊とも分かれた旨を、ていねいに書き送ったが、あの日の静かな病室が、悪夢のようなとげの痛みとなって三十年、私の胸から抜けないのである。」（164頁）。

¹⁹ 当日雨が降っていたというのは看護生徒たちの記録とも一致する。当時の看護婦生徒の日記には、「防空頭巾をかぶり脊には風呂敷包みを三つ紐でくくりつけて、合羽代わりのカーテンを頭からかぶり、なんとというか、まるで乞食同様。しかし笑うものも一人もなし。」「直ちに出発準備、雑のう二つ、水筒二つ。毛布を斜めに、風ろしき合羽をかぶって、最後に班を出る。集合してすぐ出発。哀れなる格好なれど、最後の「歩調取れ」で営門を出る。すべてのものよ、さようなら。しっかり前後左右を警備され、あえぎあえぎ歩く。憎らしい満人共よ、笑うなら笑え」とある（興城みどり会、1975、157-159頁）。

に行って遊んでいた²⁰。

敗戦の報と大邱までの引揚げ

敗戦は興城の陸軍病院で知った。玉音放送を聴いてもどうっていいことはない。負けていたことは分かっていたし。朝鮮人の兵士は万歳を繰り返していた。その後、奉天への病院の移動をした後、狭い所に軽症の患者を詰め込んだから、仕事ができない、毎日川へ泳ぎに行っている、帰られるようにしようと、同僚8人が相談して部隊長に代表2人を交渉に行かせた。部隊長は「お前ら若いから、帰って、また仇を討ってもらわないとな」と、即日帰省命令が出た。その代わり、看護婦の帰国希望者も連れて帰るということになった。看護婦はただの1人も希望者が出なかった²¹。みんな軍隊と運命をともにしますって言って残った。完全武装して、拳銃や食料をもらって夜の7時か8時ごろに出発した。そして貨車に乗って、朝鮮へ南下する予定で出発した。朝鮮との国境まで来たら、街角にソ軍が進駐していた。女の憲兵が大きな拳銃を持って立っている。なぜか裸足で立っていた。そして日本人から没収した腕時計を両腕いっぱい持って、立っている。そのまま駐車場の司令部に行って、今から南鮮²²へ渡ろうと思うが、と言ったら、汽車が無いと。無いけれど、早いこと渡らないとソ連軍がどっと入ってくる、捕まったらどうなるか分からないから早く朝鮮へ渡れといわれた。仕方が無いから、荷物や食料の瓶を抱えて、みんなでぞろぞろと国境の鴨緑江の鉄橋を歩いて渡った。新義州へ着いて、大邱に帰りたいが列車はどうなっているだろうかと駐車場の司令部で相談すると、ここで泊って明日の朝に出る急行列車に乗るようにいわれた。丸一日かかって、翌日の朝の6時頃に家へ着いた。

その当時、大邱にいる家族とは連絡を取れていない。帰って、ドア叩いたら親父が出てきて、ビックリしていた。

家族の引揚げ

大邱の実家へ帰った時、妹は肋膜炎で寝とった。早いこと日本に帰らせないといけないので親父が妹を連れて、身の回りのものだけ持って、大邱から釜山へ2時間くらい列車に乗って関釜連絡船（釜山と下関の定期航路）で帰り、すぐに松江の日赤へ入院させた。一番下の妹と母も進駐軍をおそれてすぐに引揚げて、隠岐・島後の中村に移った。10年以上外地に出ていたから、家はない。東京から戻ってきた本家が、親戚の空き家を借りていて、その部屋の奥の8か

²⁰ 当時の看護婦生徒たちも同じように川で遊んだと数多く証言している。「校庭の裏手にかなりな水量の川が流れていた。その名はたしか太子河とって、ゆるやかに淀みなく、その水はきれいに澄んでいた。私たちは時おり水に浸って水浴とシャレこんだ。」（興城みどり会、1975、172頁）。

²¹ 看護婦生徒らは8月30日の深夜に宮の原を後にし、9月2日に大連に到着している。当時の回想によれば、帰還命令が突然出され、その日のうちにトラックで宮の原駅に運ばれ、列車に詰め込まれ、生徒の中には列車が動き出して初めて大連へ帰ることを知らされた者もいた（興城みどり会、1975、177-181頁）。

²² 現在、こうした表現は一般に使用しないが、聞き書き対象者の言葉をそのまま記録している。

6畳ほどの部屋1間に母と一番下の妹が入っていた。

その後に全部荷物を持って最後に、1人で引揚げたのがわしだった。アルバムや寝具だったろうか、それだけで8梱包。さらにそこへ親戚が、「自分の所は女ばかりだから家の荷物持って帰ってくれんか」と、断れば良かったんだけど、それが7梱包。合わせて15梱包。1梱包は1立方mくらいかな、それを1つかけることなく持ち帰られたのは、今思うと奇跡だね。

引揚げのこと

大邱駅から釜山の駅まで運ぶ、ところが無政府状態だから、混乱状態で送る手続きも料金の支払いもまちまち。貨物に積んで釜山まで送る手続きしたことは覚えている。汽車に乗っても、切符売るところがない。動き出して車内で切符を買うんだが、また他のグループが切符の検査にきて、結局釜山につくまで3回も徴収された。釜山に着いてみて驚いたのは、北朝鮮からの引揚者の貨物が全部開けられて盗られている。盗られなかった晴着やらが列車からみんなはみ出てぶら下がっている、そこへ雨が降っていて、憐れな状態だった。

まずは泊まる場所を探さなければいけない、旅館の土間に泊めてもらう許可をもらって朝鮮人の人夫に頼んで荷物を運んだ。その後は食料調達。市場に行くと白米が山積みで売っている、牛肉の骨付きがぶら下がっている。お金さえ出せばいくらでもある、軍隊から流れてきた物資だったろう。日本の紙幣は持ち出しの上限があって、みんな隠して持ち込んでいた。どうやって持って帰ったかは記憶がないが、隠して持ち込んだんだろうな。

ウニの塩辛1瓶と白米を炊いて、1週間それを食べてすごしていた。なかなか船は出ない。仁摩港へ行くというヤミの運搬船があって、荷物1梱包500円、人間1人500円という相場だった。出港までは3回くらい繰り返した。米軍の監視がやかましくて出せないから取りやめと言うんだ。荷物を降ろしても、金返してくれない、金取られて、荷物降ろされてと3回繰り返した。

地元の船はダメだと、日本人の船長を探した。そこでようやく対馬へ向け出港できた。朝鮮の軍隊や米軍の監視船が夜通して港を見張っている。密航船で出入りしないようにね。夜、日が暮れてから港の船に荷物を運びこむんだが、その時にも地元の人に見逃す見返りとしてお金を渡して、何とか船までたどり着いた。終戦後の無政府状態で、撃たれてもおかしくない。夜の1時か2時ごろに港を出る。いわゆるポンポン船で。音が出て煙突から煙が出たら見つかるので、機械を止めて潮の流れに乗って流した。帆を上げてうまいこと抜けた。1時間ぐらいそのまま走ってエンジンをようやくかけた。その時の貨物運搬船は39トンだったと思う、そこに40-50人の男女が乗っている、みんな雑魚寝していた。

対馬での足止め

対馬へ着いてその晩に海が時化て、しばらく逗留することになった。船長以下、陸に上がって旅館で寝ている。引揚者は船の上に残された。結局、1週間くらい逗留した。食料が無いので同乗の3人でグループ作って食料の調達をすることにした。イモ畑が広がっていて、そこに人がおったので、イモ売ってもらおうと近づいていったら、どうやらその男がイモ泥棒だった。

わしらが近づくと、イモ置いて逃げた。これは幸いと、イモを袋へドンドン入れている所に本当の持ち主がやって来た。イモを抱えて、山の上へ逃げた。軍隊のおかげで足は強いし、元気はある。山一つ越えて、二つ越えたところでむこうが諦めて帰ったよ。帰って飯盒で炊いて、それで何日か過ごした。

対馬から博多の間を運行する定期船があつて、客船だった。わしらが対馬におる時に、その定期船がちょうど入って来た。貨物運搬船と一緒に渡ってきた人の中には、大きな荷物を持たず乗っている人も多くて、婦女子がね。そういう人が、もうこんな小さい船はこりごりだから、わたしらはこの客船に乗って帰ります、ということで、別れた。乗り換えたのが何人おったか記憶に無いけど、20人ぐらいおったんじゃないかな。それで、わしらは、見送りに行ったよ。船が大きくて岸壁に着かない、少し前の隠岐と一緒に。ちょっと離れたところに停泊して、伝馬船でそこまで客を運ぶ、そして乗せるわけよ。その伝馬船に乗って、見送りに行った。長い間、苦労を共にしたからね、どこの誰か知らなかったけどね、みんな元気でやれよって。翌日の朝の新聞見てビックリしたよ、全員死亡なんだよ。その客船が、出航して間もなく、浮遊機雷に触れて、轟沈²³。轟沈っていうのは1分以内に沈むことをいう。全員死亡なんだよ、朝刊に出たよ。わしも荷物が無かったら、それに乗ってたろうよ。

対馬から本土へ

風になったから、出航しようということになって、昼の間、イルカがそばを船の両サイドと一緒に走っている。日が暮れて、夜になったら、大荒れ。日本海のと真ん中でね。ちょっと走ってはエンジンがストンと故障で止まる。もうひっくり返る、今度来たら本当にひっくり返るかなと思って。船の中の女や子どもは、船長さん助けて一ってパニック、蜂の巣つuitたように

²³ 九州汽船の珠丸のことと思われる。読売新聞1945（昭和20）年10月16日朝刊2面によれば、九州汽船所有、珠丸（800トン）が14日9時に沈没し、54名が救出されたが、500名あまりは絶望、という短い記事が掲載されている。戦後直後の混乱の中でほとんど報じされることはなかった。日本軍が同年6月に配備した機雷のためといわれている。『勝本浦郷土史』によれば、「珠丸は昭和20年10月8日、対馬最北の町上対馬町比田勝港で、朝鮮からの着のみ着のままの、一日も早く故国日本の土を踏みたい一念にかられ、小さな帆船、漁船を雇い、命からがらやっと対馬に辿りついた引揚者と、対馬からの復員兵等、321名の船客を乗せて、同日午後2時比田勝を出港して、同日午後6時頃厳原に入港した。丁度その頃九州地方を襲った、鹿児島島の阿久根に上陸した台風のため、13日まで5日間厳原港に避泊した。珠丸は14日厳原で、更に377名を乗せて、同日朝霞煙る午前6時15分、阿久根台風明けの対馬海峡を、博多に向けて出港した。…乗客は乗船名簿によると、船客、船員数730名（船客698名、船員32名）となっている。比田勝港321名、厳原港で277名乗船しているが、当時の輸送状況は、戦後の事であり、乗船切符を入手するのは非常に困難な時代であり、闇切符が横行、更に入手できない人は、自分の家に一時も早く帰りたい事から、無切符で乗船した人もかなりおり、今もって確かな乗船数は把握できない。また現在では調査する事も不可能である。名簿では730名となっているが、当時の状況から推測すれば800名をかなり上回り、1000名以上乗船しているともいわれている。生存者は船客、船員185名（船客174名、船員11名である）、行方不明者は船客520名、船員21名となっている。かりに1000名余乗船していたとすると、約800人余が行方不明者となるが、乗船名簿を基準とする外にない。」との記述がある（285-286頁）。

なっていた。大小便は鍋・釜の中にしているから、臭いのなんの、地獄のようだった。船が傾くたびに人間もごろごろ転がる。結局、流れ着くまで、そこへ着くまでに22回のエンスト、エンジンが止まった、わしは数えていた。

やっとエンジンが動いて、ポンポン走りだした所に微かに島影が見えた、どこかは誰も分からない。ひょっとしたら朝鮮に戻ったかも分からん。こうなったらもう陸へ着けようということになった。近づいていくと岸壁からね、来るなど、手を振っていた、向こう行けと。そばに寄ったら、日本人の駐在さんで、話を聞いたら、山口県の角島²⁴だという。事情を説明するとそれは気の毒だということで、婦女子は漁業組合の2階に宿泊させてもらい、元気な男は自分で宿を探すことになった。わしらグループの3人は自分で宿を探したが、島にある3軒の旅館も満席で入れなかった。

大工さんが道具を肩に乗せて帰ってくるのを捕まえて、事情を話して土間でもいいから泊めてもらえるように、お願いをした。「うちなんか汚くて人なんか泊めるような所じゃない」って断られて。そこをしがみついて、「もう土間でもいいから、頼む」と。「そこまで言うんだったら、行きますか」いうことになった。五右衛門風呂に入れてもらい上がったら部屋に案内されて、二間続けて大きなテーブルがあって、その上にはさつまいもを山ほど蒸かして、湯気がボンボン出ている。鯛の刺身が山ほどあって、おばあちゃんがごちそうを山ほど並べてある。竜宮城に行ったような気分になった。

そこで3～4泊もしただろうか。乗ってきた船が故障で動かないから動きようがない。結局その船を別の船で引っ張ってもらった。ほんの少しの距離を他の船で引っ張ってもらって、本土に着いた。そこで荷物を岸壁に降ろした。そこで1泊して、近くに山陰線が走っていてね、翌日、荷物を全部列車に乗せて²⁵、そこで解散式をやった。（以下、次号）

付記：本稿作成に当たって協力いただいた聞き書き対象者、調整・協力いただいた島根大学特別聴講生・竹下靖彦氏、記録作成補助をいただいた島根大学法文学部4年・芝木達也氏にお礼申し上げます。

参考文献

- 岩手県農村文化懇談会編（1961）『戦没農民兵士の手紙』岩波新書。
川谷幸太郎（1996）『勝本浦郷土史』昭和堂印刷。
興城みどり会（1975）『はるかなる興城：陸軍看護婦生徒の手記』興城陸看生の会。
厚生省医務局（1965）『医制八十年史』財団法人印刷局朝陽会。
厚生省保険局国民健康保険課・国民健康保険中央会編（1979）『国民健康保険40年史』ぎょうせい。
佐藤剛蔵（1956）『朝鮮医育史』佐藤先生喜寿祝賀会。
鈴木英夫（1995）『戦陣秘帖：若き軍医の見た日中戦争』湘東文庫。
善生永助（1925）『朝鮮の人口研究』朝鮮印刷株式会社出版（広瀬編（2010）所収）。

²⁴ 山口県下関市豊北町にある角島のこと。

²⁵ 山陰線の阿川駅と考えられる。

- 大邱府編（2011）『韓国併合史研究資料97大邱民団史〔復刻版〕』龍溪書舎。
- 竹内治一（2002）「関東軍関連の陸軍病院について」『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』第3巻1号、12-17頁。
- 田邑二枝（1974）『海士町史』海士町。
- 白楊会（1980）『満州国陸軍軍医学校：五族の軍医団』。
- 橋本鉦市（2008）『専門職養成の政策過程：戦後日本の医師数をめぐって』学術出版会。
- 橋本鉦市（1999）「軍医増産の教育社会史：臨時付属医学専門部をめぐって」青木保他編『戦争と軍隊』岩波書店。
- 広瀬順皓編（2010）『日本植民地下の朝鮮研究：第3巻 最近の韓国、朝鮮の人口研究、朝鮮統治秘話』株式会社クレス出版。
- 吉田裕（2007）「戦争史研究と医学・医療問題：軍事史と医学史の接点を探る」『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』第8巻1号、1-7頁。

The Medical Education under the Government-General of Chosen and An Activity Army Medical Officers in China: The Oral History of a Certain Doctor (1)

SEKI Kohei and HASHIMOTO Takahiko
(Shimane University / Ritsumeikan University)

[Abstract]

This paper is a record of Oral History from a certain doctor. This paper intends to clarify the current status of medical activities in Mainland China around 1945 and the training of doctors under the Government-General of Chosen.

Key words : Medical Education, Army Medical Officers, Medical School, Army Hospital, Mukden, Repatriation